

文化高知 8

大空一碧

森本正紀

高知は四国の南部を占拠し、気候的には甚だ恵まれて居る。大空一碧、南国土佐、最近台風銀座でもなくなつた。

本年は坂本龍馬生誕百五十年に当たり、色んな祝いごとがあり、街では騒いでおる。それと同様、高知医大の電算システムを見に行け、その電算化は一見に値するものとして、各地から有志が続々と見学に来る。

高知は一般に田舎者で、礼儀作法を弁えぬ者が多いと云うが、根は善良な人ばかりである。その田舎者が高知医大に来て、廊下を一見、塵一つ落ちていないのに先ず驚く。特に患者の混雑する外来の待合を見給え、煙草の吸い殻が落ちて居るのを見たことが無い。指定の喫煙所以外で吸っている人は皆無である。時に慣れぬ人が煙草に火をつけたまま玄関から入り、まれに廊下を歩くのを見かけるが、余りにも綺麗な廊下に気がつく、一度手にした煙草の火を消してポケットに仕舞い込んでしまう。廊下に塵一つ落ちていない。此の実況が、本院の慣習の第一歩で、院内清潔の手始めである。

本学の開設当初からオール電算シス

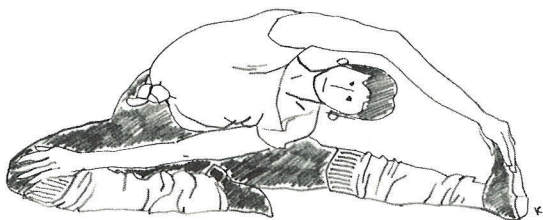
テムに着眼したのは、昭和二十一年早々のことで、当時国内の業者は病院のオール電算化はしたことが無いのと申して、難色を示した。二、三の業者に当たったが、皆態よく逃げるのみで、埒があかぬ。己むなく、私はニューヨークに飛んだ。IBM本社の幹部と懇談したが、これ又当初からOKと云わなかった。一、二日社内内で相談してから返答するといふ。当日は一人しよんぼりホテルに帰った。二日置いて、OKの電話があり、やれやれと思つたものだ。以後、日本IBM社は常に人を派し、惜しみなく協力して呉れた。

現在本学の医学情報センターの機器構成は以下の如く成つておる。中央処理装置としてIBM13083E型(診療業務用)、同4381型(教育、研究、開発用)の二台を設置し、磁気ディスク装置として3375型十台、3370型七台の十七台(ディスク容量計一二〇〇MB)をおき、端末には医療業務用として百六十二台、医学情報センタ―用二十八台、教育、研究用に三十六台、図書・会計事務用として四台、計二百三十台の端末で、間に合わせている。そして、Integrated Medical Information System 略してIMISと呼

称しておる。未だ未だ不備不完が目につくが、幸い本年度から情報処理部長が教授として公認され、本省も本学のIMISには注目しているらしい。

四、五年前から本学のIMISには、方々から見学者が続々来訪した。今迄に何百人来たか、兎に角土佐の一隅にIMISありと、有志の者は全国的にも注目しておる。国外からも見学者が来る。

川本健次郎 各種機器は今後益々発展するであろう。併し機械に使われる医師に成つては墮落である。機器を使いこなし、思考、思索を多くとり、



「ストレッチするひと」

診断、治療に充分時間をかける様心掛く可きである。そして時間を更に研究に差し向けよ。医の根底は人類愛だ。HEART TO HEART、患者に接しては常に人類愛を以て対応する。今後の医療は益々複雑、精緻化する。併し夫れに屈してはならぬ。人類愛を以て患者に対応することを心掛く可きである。患者を人間性を持たぬ物質扱いするとは断じて許されぬ。医は心だ。諸君よ大悟一番されよ。

(高知医科大学学長)

土佐と京都

中島文博

来月になると、私もとうとう五十代の太台に乗ることになる。三十歳になった時も、夢に描いていた黄金の凱旋門が音高く瓦解したようなイメージを持ち、否応なく現実に眼を向けざるを得なくなったものだった。が、五十代にさしかかろうとしている私も、人生の新たなメルクマールを刻印することになりそうな気配を感じさせられている。ありてい言えば、これからは今までのようにはいくまい、何らかの方向転換を余儀なくされるだろうという思いがしきりとするのだ。

考えてみればこの五十年、元来が不器用な私がよくも大過なく生きてきたものだという気もしないでもない。少年時代から、自分は果たして一人前に人生をこなしていけるだろうかという危惧が頭を離れたことはなかった。

映画やテレビの脚本を書くようになってから、仕事上の不安から解放されたことはない。自分はもうこれで安泰だ、などと落ちついた境地に達したことは一度もない。死んだ父は、私がNHKの大河下

ラマ『草燃える』を書いた時に、海のものとも山のものとも知れぬシナリオ・ライターがようやく安定期に入ったと受け取って安堵していたようである。しかし、その頃も今も、私は依然として大家ふうの威厳が自分の身に合わないことを知っている。足許の地盤が危うくなってひっくり返る時は、いつでも大仰にひっくり返ってやれと思っている。

ひっくり返ってもまだ書きたいことは山ほどあるし、テレビというメディアにこだわって書いては書けないことも数限りなくある。

ここで私の五十年をふりかえってみたりすることはいかに爺むさく勿体ぶった行為に思えるけれど、物理的に区分けするならば、十歳までの京都時代、十歳から二十一歳までの土佐中村時代、それ以後の東京時代ということになる。東京に来てからはや二十九年も経ってしまったのだから、歳月の早さと相変らずの自分の未熟さに呆れてしまう。と同時に、二十九年間という長さにもかかわらず、私という人間が形成されたのは東京ではなく、京都であり土佐で

あったと認識を新たにしている。それは勿論、幼少時代から青年期の一番多感な生育期を過ごした土地だから、当然と言えば当然なのだが、今、ある感慨を持ってそれを受けとめている。

京都はひたすらに懐しい。私たちが住んでいた浄土寺南田町の借家は今も面影を留めて建っている。勿論、当時の建築のままではなく新しく建て直されてはいるが、門から玄関へのたたずまいや、二階の窓の取り方などを見ると、殆どあの頃と同じ間取りで再建されているらしいと分る。

その二階の六畳と八畳の二間つづきが父の画室になっていた。父は絵筆の先をチョロッと舐め舐め絵絹に向かつて描いていた。夏でも膠を溶かすために火鉢の中には炭火がいかかっていて、灰の中に突っ込まれた試験管のようなガラス容器の中で膠が飴のように曲って溶けかかっており、その特有の臭いが鼻を打つのである。

父の画室で私は学校の宿題をしている。ときどき絵筆をとめて父が教えてくれる。あとは父のしわぶきが聞こえるばかりの静かで透明な時間の流れが過ぎていくのだった。

だが、土佐の果て中村に疎開してきてからはとてもそんな具合にはい

柔らかな心

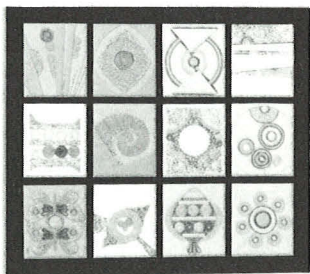
別役佳代

あれは昭和三十九年の秋ではなかったか。遠くイタリアから二人の歌手が来高した。十七歳の可憐な少女、ジリオラ・チンクエッティとテノールのルチアーノ・タヨリである。異国の歌手を目の前に、初めて生で聞く、「ノノレタ」「カタリ」など南欧の愛の熱唱に十四歳の私がどれほど感動したことだろう。

昭和五十二年四月、残雪の比良の峰に心を残して、私は四年ぶりにふるさと高知に帰った。時の経過がそれなりの幅で私を浦島にする。

高知城の南のほり端で、あの土ねず色の中央公民館が跡かたなく消えているのを見、通りがかりの人に移転先を教えてください。

「じゃあ、県民体育館のどこですわね」



山岸雅恵 花押会とくさ回「転転」第7回展からデザイン

かなかった。本性むきだしの土着の人間群に私たちは取りまかれ、父までがたちまち彼らと同化して酔態を演じ始める。見聞きするすべてのものが荒々しく、生ぐさい人間の臭気を発している、そこは私たちにとってまさに蛮地だった。私たちにしえの貴種漂着譚に自分たちの運命をなぞらえたりしたが、両親の郷里なのだから、それも笑止というものであった。しかし、土佐で私は人間の原形を見た。そして、それがドラマを書く上での私の基盤になっている。

処女作『南の風と波』や、十年前にATGで製作した『祭りの準備』もそんな基盤から生まれてきたのであるし、土佐出身の多くの作家のように、私も土佐の精神風土を物語り化する事によって、中央へと取奪することになっているのかもしれない。

五十歳の誕生日を目前にして、それが許されるなら、これからが本気で郷土の物語を書く時がきたのだと思っている。これまでの現実主義を振り捨てて、三十歳の誕生日に瓦解した黄金の凱旋門をくぐるべく夢を追って進もうと思う。

(シナリオ・ライター 東京在住)
訂正 前号二頁の森田勇造氏の肩書は(幼)青少年交友(流)協合理事長ですの、お詫びして訂正します。

ダイヤを磨く県民性

坂木卓弥

「いごっそう」は私の好きな土佐の言葉の一つである。が、しかし最近やや違った意味で軽々に使われているようだ。「わしやいごっそうやきに」とよく耳にするが、聞いてみれば、何でもかんでも理由なしに反対する者すべてが、いごっそうの仲間入りをしている。それを言うなら、へそまがり、分からず屋、天の邪鬼の類であって、あの職人気質にみられるような一徹さ、頑固さとは全く意を異にするものであろう。

高知の県民性を県外人の立場から分析してみると、本物のいごっそうと天の邪鬼の二つのタイプに分かれるようだ。従って高知では、この二つの力関係が物事の成否を決めると言っても、決して過言ではない。何か事を始める場合もこの二つの力が正負に働き、仲々に進まないケースが多い。土佐の指揮者が一番苦労するものもこの点であろう。龍馬生誕百五十年祭が今一つ県民全体のものとして盛り上がり欠けると言われるのもそこに起因する処が大きい。「勝手にやりや、わしや知らん」という人が余りにも多過ぎるように思える。

そういつ(ふ)子が減らない限り高知では何をやっても成功をみることは難しい。

しかし、逆に言えばそれだけ玉石混淆の県民性ということかもしれない。硬いダイヤはほとんど磨かれて輝きを増し、軟らかい真珠は傷ついてポロポロになってしまふ。確かに両極端の強烈なキャラクターには他県にはない迫力や魅力を感じる。そして、土佐の偉人たちがほとんど他国で功なり名遂げるのもその県民性のなせる業かもしれない。

だが、交流の機会が増えたこれからはどうであろうか?。全国レベルの事柄においては、通用しない部分も多々出てくるのではあるまいか。今大切なことは、個々が目標を見極め、協調しあい、全体のレベルアップを計ってゆくことではないだろうか。真珠も優しく磨けばダイヤ以上の光を放つものである。

私も高知に来て十八年が過ぎ、生れ育った山口県よりも長く在住することになった。いよいよ来年からは、土佐人を名乗るつもりだ。しかしこう言えば必ず、「いやいやおまんは、まだ県外人よ」という意地悪ないごっそうの声は今にも聞こえてきそうだが、こればかりは、自分自身の自信の無さからくる空耳かも知れない。(高知放送アナウンサー)

と念を押す私を相手はいぶかしがり、そして今は県民文化ホールが建っていることを告げた。

むろん高知不在の四年の間にも大津打出浜の市民会館で、岡崎の京都會館で、南座で、様々な演奏を演劇を友と恋人と愉しんだ。そして帰高後は、音響のすばらしい県民文化ホールへも幾度か足を運んだ。

だけれども、あのコンクリートの鉄窓の体育館の、あの薄く堅いイスで、目にし耳にした情景を、あの小雨降る秋の夜のことを、忘れ得ないのである。(かつての県民体育館の担った文化的業績は記録に留められているか?)

三十代も半ば。仕事に、子育てに、そして日々の洗たくに追われながらも、私の内にながが「真実なるもの」「美なるもの」を求めてやまない。仕事柄、年若い人々と日々接することができる私は幸せである。彼らの心は、絶えず揺れ動いている。あこがれと失意、歎びと悲しみ。「愛」を知り始めた心と体は、どんなに美しいことだろう。たとえ時に貝の如く殻閉ざすことがあったとしても、彼らの恥じらいが、涙が、反抗が、私には愛しい。

青少年の柔らかな心を育む、みずみずしい感性を高知の文化に期待したい。(県立盲学校教諭)

絵のこころ

横矢 まさる

「なぜ絵を描くか」と問われても私はただ絵に惚れぬいた、命がけの恋だとしか答えられない。まして、「絵のこころ」などと、全く何と答えるべきかの見当もつかない。第一絵とは？、美とは何なのか、私は何とも分かったよう分らない、言葉にならないのだ。

川端康成は「美とは偶然の邂逅である」などと言う。専門の学者の領域だろうが、そんな屁理屈を讀者は求めてはいないだろう。一般的に絵の世界の有難味、功德といった話が興味があると思って、我田引水式に絵の宣伝を述べさせていただく。

私は子供の時から絵が好きだった。「好きこそもの上手なれ」であろうか、ちよびりほめられて得意になり、自信をつけたことがこの道に入るきっかけとなった。教師になって美術教育（美術をおしての人づくり）を追求し、実践を繰り返しながら、自分の絵も描き通した。退職後、請われるままに大人たちに絵の指導をするようになった。ところが次々と希望者があえるのに驚いた。今までこんな現象はなかった。学校のPTAの文化活動で絵画クラブを

何度も作ったが、一度も成功した事がなかったのに、月謝まで出して教えてくれという……。

考えてみれば、現在は経済の高度成長の頂点の時代である。豊かな物資や経済的に恵まれ、生活に余裕ができた。今まで、ただひたむきに働き、物を追い続けてきた物質主義の空しさに気づき、その反省から精神主義、心の豊かな生活を自然に希求するようになった。

芸術は無くても死ぬことはないが、芸術がなくては生きられない。こうして集まってくるお弟子さん

たちは、高校生から、お年寄りまで、男女、年齢、職業、それぞれ多種多様であるが、一応共通しているのは、幼少時代に自分の絵が認められ、ほめられた経験者であることだ。その経験は歳月が経っても、なおその人の心の中に強く刻まれ、いろいろな形で、その人の生き方に力づくよく活力を与えてきたことであろう。「ほめる教育」や「叱らぬ教育」の重要



横矢まさる

さしみじみと思うのである。描きながら難しいと尻ごみする者に私は言う。

「難しいから面白いのでしょうか。たやすく簡単にできるようななら、すぐ飽いてやめるでしょう。いくらやっても、果てしなく深く深いから、命がけで追求する魅力と価値があるのです。難しさを一歩一歩克服する喜びを繰り返して、積み重ねていく過程こそ絵の生命と言えます」

けだし、その難しさとは多くの場合、視覚的な形態描写、すなわち写真のように実物そっくりに描くことを指している。しかし、現代の美術はそれを否定さえする。自由に考え、自由に主張する現代絵画の多様な表現様式を見渡すだけで、安心と自信がもてるのではないだろうか。絵はどこまでも感性、感覚の産物である。

「先生何だか自分の眼が変わったようです」と一人の弟子がしみじみと言う。人を

生に、絵を描く生活が加わった事で「これを絵に描いたら……」「この色の魅力は……」など、絵画的視点から物事を観察するようになり、魚屋、八百屋に入っても、野道や町を歩いても、雨が降っても今まで気がつかなかった新鮮な美の発見に心がはずんで、何かしら世の中が楽しく豊かになった、と述懐してくれた。「うちの家内はものになりまするうか？」

こんな挨拶を受けることがよくある。趣味の世界には互いに周囲の者が理解しあい協力がなければならぬ。だから、

「とても熱心です。感覚がいい、思いきった冒険するからたのしい」などなどと言うと、ご主人の口から「先生がこんなにほめていたぞ」と奥さんに伝わる。すると彼女は最高に発奮するだろう。晴れ晴れと明るい気持ちで、やる気一ぱいで意欲的に取り組む。結果として、飛躍的に優秀な作品がひとりで生まれることになる。

絵は感情、感覚の問題と密着している。明るく生き生きと充実した状態の時、すばらしく感覚は研ぎすまされ、パレットと画面の上に次々起こる変化を見つめながら、予期しない知恵が湧き、発見をとらえる事ができる。それを表現に取り入れ、思

考、工夫、推理、冒険を繰り返し（創造的活動）ながら作品に自分の理想を定着していく。その心の中の闘いこそ絵の醍醐味といえよう。全く我を忘れ、世の中の一切も忘れ、有頂天になってその絵一つに集中する。これこそ絵を描く最高の境地である。喜びも悲しみも、欲求不満も、夢も願望も、絵を描くことで浄化され満たされ解消し、平静満足の心境に至る。そんな心理的効能も絵の働きである。

人生は幸福の追求であると言う。人間の欲には際限がないが、山頭火はその幸福について主観の副産物であると訓えている。一応常識的に考えて幸福の条件は次の四つと言えるだろう。

- (1) 健康 (2) 経済 (3) 子供 (4) 仕事

それぞれについての説明は省くが、仕事についてだけ言及すれば、生活を支える仕事が命をかけるに値する生き甲斐のある仕事であれば最高に幸福と言えよう。

福沢諭吉はこう言っている。「世の中で一番寂しい事は仕事のないことである。世の中で一番楽しく立派なことは、一生を貫く仕事を持つことである」

命をかけて打ち込む世界、生涯追求して倦まない趣味対話の世界を持つ

私の風景

吉本 雅彦

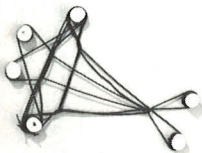
撮影場所 高知市桜井町二丁目
撮影月日 昭和60年9月20日



私が生れ育った下町、旧南新町、(現 桜井町) そこには、子供の頃とまったくかわらぬ景色のみえる時がある。あたかも、この町の時計が止まっているかのよう、一瞬錯覚してしまう。

生活科学から家政学へ

松崎 淳子



島中慶子展から

高知女子大学は昭和二十四年に女専から昇格し、家政学部一学部生活科学科一学科のみの大学として発足しました。歴史は浅く、校舎も貧しい高知女専が大専と並んで公立としてはいち早く女子大学に昇格し、歴史も校舎も校舎もはるかに立派な老舗の女専が軒並み審査に落ちたというの話題になっていました。認可に際して「個性的な生活科学の教育をめざす」という趣旨がかなりの説得力となったといわれています。

ところでその草創期を担った教授たちの間では「生活科学とは何か」の論議が盛んだったとのことですが、女子大三十年史によれば「研究対象である生活とは、人文科学、社会科学、自然科学の諸科学が追及すべき学際的な問題であるという一応の答えが出されていた」とあり、当時の認識は家政学よりも生活科学に重点があったということがわかります。

事実「生活科学を科学する」ということは、当時極めてナウい響きをもっていました。ナウいといえばもう一つ、「女子の大学」が生まれる「夜明け」のような気負いがこの草創期を彩っていました。これまで伝習の域にあって家事を、科学にというパイオニアの意気がただよっているために、学問的方法論の弱さに対する危惧を忘れさせて

くれるという効果もあったと思います。とにかく、そんなときに私は調理研究室の助手になり、実習のための木炭をのこぎりでゴシゴシ切っては鼻の穴を真黒にして働いていました。炭は都市ガスに変わるところ、研究室の表札は「調理学研究室」になりました。学会でのデータ蓄積も進み、料理のコツは伝習から調理科学へと様子が変わりました。顕微鏡やミクロトームや粘度計などの機器もすんなりと部屋に落ち着いて、とにかく調理を科学にという至上命令のもと迷いはなかったように思います。しかし、全く思いがけないことが起こったのです。

貧しかった食卓が豊かになり、農山漁村のくらしにも便利な生活財が導入され、いわゆる都市化が進みました。衣も食も住も、望んでいた快適性をすべての人が享受できるようになってきた——と思われました。思いがけないことは、安全性を脅かす食品の出現です。それは、豊かさの質を問いただせる契機となりました。工業の論理を食品に適用すれば、大量生産、大量消費に耐えることはできるが、必要悪としての食品添加物が登場します。元来食べものは金属や繊維とはちがいききものである限り、工業の論理にはなじ

まない筈でした。しかし、食品工業界は次々と新たな加工食品を世に送り、それがまた新たなニーズを生むという循環を作りあげてしまいました。一方、食品をどう調理すれば美味になるのか、それは食品のどういう特性からくるのかという調理科学にしても、胡瓜の皮には農薬が附着しており、剥皮しても土壌中の農薬は果肉に及んでいるとなれば、どんなに上手に調理しようと健康阻害要因をとり除くことはできず、食べものとしての価値はないのです。となれば、生活科学には今一つの掘がりを求めたくなります。生活を科学的に捉えることで家事を良質に導くことはできても、生活をとり巻く環境からくるさまざまな阻害要因に対しては無抵抗でしかない。そのような学問に存在理由があるのでしょうか。しかし一方物理学などの理論科学領域の教師群からは、私たちの日常の発言をプラグマチズム（実用主義）だときめつけられるなど没価値的志向に貫かれた科学の場では立ち往生の有様でした。

ところで、この道程は日本における家政学の模索の道そのものであったようです。今では識者によつてはつきりと規定され、生活科学は家政学の一領域即ち点であつて、それ自体が家政学そのものではないことを明らかにしています。

では家政学とは何か。一九七二年、ヘルシンキで開かれた国際家政学会での「家政学に関する宣言」には「家政学は、家族員の身体的要求を最適に充足させるために、家族生活の秩序及びそれと地域社会との関係の整理をはかる学問である」「家政学は、それ自身は理論科学ではない。（中略）種々の

科学と技術を基礎としてそれらを用いるが、それらはいくまで手段であつて目的のものではない」「家政学の存在根拠と目的は、家族を中心とした生活の価値を認識することにある」と述べています。生活科学を知識として持つこと自体が学目的ではなく、それを合目的的に経営して生活の価値を守ることが家政学目的だという認識によつて漸く学問としての存在が納得されたと感じます。

ここでいう生活の価値とは「衣食・住を充足し、病気をせず、人と豊かに交わり、人の役にたち、自己の能力をのばすこと、のびをもち」ことです。この価値の実現のために家庭を営み、自治体や国を作り、便宜のために企業や組合があります。あくまでも企業や組合や国の発展のために人が存在するのではない。往々にしてこの価値関係は逆転して、企業や、組合や国に人が振り廻されるという事態をひきおこします。それも構造的に。

生活にかかわる諸現象を「人間らしく生きる条件」にてらしてみつめてゆく視点で家政学の視点であつて、万が一、農学、工学など他の科学とは未端ではかみ合わない部分も生じる可能性も否定できません。しかし自由経済大日本には、家政学的視座が求められべきだと痛感しています。福井謙一氏がその講演のなかで「社会は今後も科学化に向け進むであろうが、今、地球の視野で求められているのは、人類の恒久的生存であり、そのためには科学に規範を与えるべきです」と述べられたが、同じことをさしている私は解釈しています。（高知女子大学家政学部教授）

木星会

川村 純史



私は大川村で生まれ、小学校を卒業して高知市の中学、高校に進み、その後、大阪の大学で建築学を学びました。大学ではインテリア・デザインに興味を持ち、職もこの方面に求め、大阪で働いていましたが、家庭の事情で、昭和五十五年末に大川村に帰郷し、林業会社に就職しました。

仕事は、林業全般の管理でしたので、林業というものをいろんな角度から考えてみる機会に恵まれました。そしてこの急激な時代の流れのなかで、作業の行程や使用する機械などを初め林業界の体質そのものが、旧態依然——幼い頃の記憶のままであるという事実に愕然としました。そのなかで、特に考えさせられたことは、昔は木材の需要が多く、どんな材でも飛ぶように売れたのですが、現在は直材でないと売れなくなり、曲材はただ同然であるという事実です。曲がった材は根元から八十センチ位までを切り除き、途中の曲がっている箇所も捨てなければなりません。また、間伐材は価格が安いので、量がまとまらな限り、山の中に捨てられています。木材価格は昔のまま、人件費は何倍にも高騰しているのです。林業経営など成り立つわけがないと一般に思われるかもしれませんが、所有者の多くは副業を持っているため、貯蓄のつもりで、将来になれば木材も売

れるだろうとと考えて山林の世話をしています。

間伐材、廃材は、プロパンガスなどの普及により燃料にあまり使用しなくなったためと、置き場の問題で、邪魔物扱いされています。汗水垂らして長い年月をかけて育成した木材が利用されず、山の中に捨てられている現状に心を痛めました。間伐材、廃材を活用して、おかず一つにでも代えられる収入の途はないものか、思案しながら仕事に携わっていました。

幸い、村内には、木の好きな若い仲間がいました。昭和五十九年四月、椎茸の生産者、林業会社、建設会社、森林組合などに勤務している者など九名が集まって木星会を結成しました。そして、林業の現状、先端技術を追いかける時流、など、いろんな疑問や悩みをぶつつけあい、情報を交換しあうなかで、

- ・無尽蔵にある間伐材や廃材の利用方法
- ・木の良さを知らせ、需要を開拓する
- ・現代人にアピールする木製品づくり
- ・村の特産品、地場産業をおこし
- ・村内に就労の場を拡大する方策
- ・オリジナリティーに富んだ製品
- 等々、活発なディスカッションを通して具体策をさぐりました。そこで、雑木、かづら等でアクセントをつけ、世界に一品しかない木製品である事を

キャッチフレーズにした製品を作ったりもしました。最初は思いつくまま、簡単なものから始め、一つ作ってはみんなで批評しあいました。面白いもので、自分たちが作ったものが売れるとガゼン意欲がわき、次々と新しいヒントが浮かびました。

子どもの遊具 プランコ、シーソー、まるころりん、おもちゃ：

各種アクセサリー プローチ、ポタン、鉛筆、木のエブ、額縁、黒板：

家具 丸テーブル、背イス、座卓、机、本棚、長イス、食器棚：

小物 傘立て、化粧台、手紙入れ、靴置き台、調味料入れ、森林時計：

エクステリア ベンチ、犬小屋、木の鉢、方向板、塵入れ、仕切り台：

試行錯誤して作った木製品には、いろんな方面から反響がありました。一番多く買っていたいたのは三十歳前後の女性でした。自然への憧れと自然物の美しさに敏感な人たちだと思います。この様な人には自然志向があり、幼い時に使った木の感触を思いだすのではないのでしょうか。その他にはコンピュータやパイオ関係の技術者や研究生の顧客が多いのがつきましました。そんな人々にとっては、木製品はかえって新鮮なものに見えるという感想もいただきました。

自然の色というものは人間と同じで、若い頃は美しく、年を経るにつれ味がでてくるものです。木の場合も作りたての時には香りが美しい木地を出していますが、使えば使うほど、磨けば磨くほど艶が出てきます。

おもいがけない成功に、気を良くした私たちは、村外の人たちの協力も得て、さらに魅力的な木製品の開発に向かおうとしています。新しい試みとし

て宅配も実施しました。これには納品の時に、お客さまから製品に対する率直な感想や提案などが聞けるメリットがあります。さらに、その他大川村の特産物の販売の話にも広がっています。

事業の拡大にもなつて、生産の効率化、省力化、販売や企画の体制を整備しようと思えます。さらに将来には、若い人たちが、喜んで集まるデザイン工房、創造センターを目指して発展させていきたいと夢は広がります。

私はアントニー・ガウデীরこの言葉が一番好きです。

『自然を作った創造主である神は、無益な教えは何一つされてない。言い換えれば、すべてはその教えの産物である。人間の発明はこの教えを知ること、すなわち自然の模倣である。それゆえ自然の法則と調和していない発明は考えられないのである。』

雑木林は、新鮮な空気や美味しい水をつくり、人の心を和ませ、小鳥や小動物の楽園です。それを今ではほとんど切りつくしてしまいました。植林の奨励を推進させた行政関係者の中に、先見の明を持った人が一人でもいれば、山崩れのない、水の豊かな、鳥の鳴き声のする、豊かな森林が出来ていたのではないだろうかと思えます。その様な自然になるには何百年も歳月がかかるといわれています。

大川村は林業で生計をたてていかなければなりません。そのためには、木を守り、木の良さを知らせ、需要の増大に繋がる方法を講じなければなりません。人が自然を守れば、自然は人を守ってくれる、と昔の人は言っています。味わうべきことばだと思います。

ギター製作

田村 広さん(長尾山町)

手ごこち一筋

(五)

文 西岡 寿美子
写真 岡崎 禎 広

「落ち込む、とか、ワナにかかるとか、かいうと穏やかではないが、人が生涯のしごとにめぐりあうまでには、何と奇妙な試行錯誤の道程が用意されていることだろう。」

本来なら、裁判官か弁護士になる筈だった田村さんが、全く方角違いのギター製作者になったのも、赤紙(召集令状)世代で、国家に大きく進路を曲げられてしまったせい、ばかりとはいえないようだ。誰の上にも見えない大きな手というものがあって、その人間が占めるべき場に辿りつくまで、折々首筋を掴んで軌道修正をするのではない。か。どんなに本人が異を唱えても、他のどこでもなく、その人にはその場こそ最上の適所、と思われることが多い。誰もが天の用意したワナにかかるとのである。

関西大学専門部法律学科。学業の成る間際に、田村さんは召集される。日本が連合国に宣戦布告をした昭和十六年十二月八日の、わずか二日後にはグアム島に上陸していたというから、南方派遣軍の第一陣かもしれない。グアムからラバウルへ。西部ニューギニアのサラモア。最後は東部ニューギニアへと転戦。その頃には、部隊は飢餓とマラリア、 Deng 熱等の熱帯性疾患で、戦意どころか、密林中のあてもない彷徨、迷走であった。

「戦場掃除隊」は、戦闘のあとの戦線を、文字通り清掃する連合国軍の後

統隊である。憲兵、衛生隊で組織され、屍体を集めて焼くこと、銃砲の回収、傷病兵の収容を任務とする。昭和十八年。田村さんは、この戦場掃除隊に、屍体の中から掘り出された、餓死寸前の遺棄兵であった。プリズベーン市の連合赤十字病院で手当を受けたあと、同じオーストラリア、シドニーの奥のカウラ収容所へ送られる。

このカウラ収容所で、折角とりとめ一命を、また田村さんは失いかける。これは他に記録もあるようだが、日本兵捕虜の集団脱走事件があり、総数約千名のうち、銃撃による死亡二四六名、ほぼ同数の負傷者を出した大事件である。この惨劇に田村さんも加わっていたのである。聞けば、収容棟全三十一棟の、各別に蒲団のワラを抜き出し、進軍ラッパを合図に一齐に放火して脱出したのだという。二重扉の内側に折り重なって息絶えた流血の間から、この時も田村さんは奇蹟的に生還した。運の強い人である。

ここカウラ収容所で、田村さんにとって記念すべきギター第一号が誕生するのだから、人間何が幸いするかは世界のためではない。下地はあった。父親が三味線の手利きだったので音感に養われていた。大学の休みには近くの旭小学校のピアノを使わせてもらってもいた。しかし、楽器作りとなると、誰にでも出来ることとは思えない。「うまく出来ましたか」ときくと、「出来

子屋なんて、素人では難しかったでしょうに」「いやあ、何しろ物のない時だから。まんじゅう、あはよく売れたなあ。流しもの、練りもの、焼きもの、何でもやりましたよ。よその店のものをひよいて覗いてきて作るんですわ」非常に儲かって家を建てた、というのである。印刷も、よそは手刷りの時代に、デンマーク製の輪転機を入れていたというから、目も早い。商才もある。発明の才は楽器作りだけではないようである。

しかし、田村さんの天職はやはりギターだろう。復員直後からポツポツと手掛けていたギター作りを、漸く本業として、工場を持ったのが昭和三十八年。十数年転々の末の軌道修正がこ

でなされたのである。折も折、ギターの絃がガット(羊腸)からナイロンに代るとの時を同じくして、日本の高度成長期がくる。空前の好況の中で、クラシックギターも全盛期を迎える。田村さんの工場も、一時は四十人の従業員を抱えフル生産。ア



べて外材である。ただ、作業するのは田村さん一人だから工場はいかにも広い。数台の機械が、埃をかぶってうずくまるのもわびしい眺めである。しかし、田村ギターの、本当の名器は今から生まれるだろう、とわたしは思う。この精緻でデリケートな楽器に量産は向かない。孤独で偏執的とも思える根気で、木取りから糸張りまで一人の人間が

ましたとも」とにっこりする。田村さん二十五歳。大工道具も木もあった。絃はなかったが、同じ収容所のイタリヤ兵捕虜に頼んで手に入れてもらった。「彼等はね。よく働くので金もある。物も持っている。こちらが片言でイタリヤ語を——音楽用語が大抵そうなのでそれを——叫ぶと、連中が喜んでね。煙草はくれる。ケーキはくれる。お陰で不自由しなかったですよ」

多弁というのではない。それなのに実に人なつこい、邪気のない目をした人である。音楽は世界のことばだが、それを奏でる手を持っている田村さんは、これらの壁をもやすやすとくぐり抜けられる、根っからのコスモポリタンなのかもしれない。

収容所内では、月一回の演奏会に備え、ギターだけでなく、マンドリンも田村さんは製作した。ピアノ、バイオリン、ギター、プロ級の兵が何人もいて、田村さんを含め楽団は大いに活躍し、大いにもてたそうである。昭和二十一年四月に復員。五月には県庁渉外課へ入ったが、戦後のインフレでとてもことに食えない。九月に見切りをつけてヤミ屋に転向した。そしてこれには早くも結婚しているから、生活の目途も立ったということだろう。以後、炭屋、菓子屋、出版社勤め(東京)、印刷業と転職する。ふしぎにそのどれもが時流に乗っている。「生きる才覚」にすぐれた人である。「お菓

終始手をかけてゆく。たとえば塗り、研ぎ出し、吹きつけでも、十五回も繰り返す作業には、一貫した砥めるような執心、とでもいうべきものが必要ではないか。モノを創ることの根源は、そういうものだろうと思う。

田村さんのギターは、プロ奏者からマニアに近い愛好者まで、月産五百台という稀少な製品を順待ちしているときく。オリジナルの逸品を手に入れようとする人の目は高い。

大正七年生まれ。ご長男は東京で弁護士となり、果たせなかった田村さんの志の一つを継いだ。下の方は現在は運送業だが、先年までギター製作に関わっている。やがてはまたギターに還ってくるかもしれない。

お別れをいう前に、見本のギターを、工場の薄明の中で田村さんが弾いて下さった。木を削ったり、ペーパーをかけたたり、ノミを使ったりするその手は、白っぽい木屑とも、砥粉ともつかぬものにまみれ、爪の間には黒い塗料が詰まっている。その手がフラメンコギターで、クラシックギターで、太陽がいつぱいや、影を慕いてや、植生の宿バラが咲いた等を、時には口ずさみながら爪弾くの、わたしは思い深く聴いた。荒涼とした工場はいつかステージに変わり、日本の、高知の片隅はフラメンコの、スペインの風光を揺曳する。美しい音色である。天国と地獄を見たら人の心情が、その手に成った楽器から鳴り出す様は、異様に感動的である。——こんな人がここに埋れている。ギター奏者としてのこの人の音色を、わたし一人の享受としたことは返す返すも惜しい。受難も転変も、こうまでミュージズに愛された人なれば是非もあるまい、と思えてくる。

都市づくりに向けて

計画・提言・報告書等(Ⅰ)

(国、県等の共同調査)

中小企業庁委託事業
高知地域・商業近代化地域計画
報告書 昭和五十七年三月

商業近代化委員会高知地域部会
(高知商工会議所内)
高知広域都市圏パースントリップ
調査報告書

調査集計編 昭和五十五年三月
解析予測編 昭和五十六年三月
交通計画編 昭和五十七年三月
総合ターミナル編

高知広域都市圏総合都市交通体系
調査委員会
(県土木部都市建設課内)
高知駅周辺市街地整備基本構想調
査 昭和五十九年三月

高知広域都市計画緑のマスター
プラン報告書 昭和五十四年三月
県土木部都市建設課
高知県委託事業
高知県総合経済振興調査報告書
K O C H I I パワフル21
昭和六〇年三月
編集 ㈱三菱総合研究所
(建設省)

歩道空間整備調査報告書
昭和五十九年三月
(高知市)
高知市総合計画一九八〇
昭和五十六年三月 編集 企画課

高知市実施計画 昭和五十八年と六
〇年
昭和五十八年六月 編集 企画課
広がりゆく高知のまちづくり
昭和四十七年 編集 企画課
高知市みどりのまちづくり基本計
画 昭和五十二年十月 みどり課
高知市産業政策研究委員会報告書
産業総合センター構想
昭和五十七年一月
高知市産業政策研究委員会
観光と交通問題に関する提言
昭和五十八年七月
高知市商工業振興委員会観光部会
新しい文化都市創出をめざして
——一六の提言——
昭和五十七年一月
高知市文化行政研究委員会
高知市都市美計画の策定に向けて
昭和五十九年三月
高知市都市デザイン委員会答申
新しい高知文化創造のために
——急がれる三つの施策——
昭和五十九年五月
高知市文化問題懇話会提言
都市交通対策基本計画
昭和五十九年三月
審議会答申
はりまや橋周辺整備構想調査報告
書(要約版) 昭和五十九年三月
はりまや橋周辺整備構想調査委員
会(観光課委託事業)

高知市中心市街地再開発構想
昭和五十九年九月
高知市中心市街地再開発研究委員
会
高知市駐車場整備構想
昭和五十九年九月
高知市中心市街地再開発研究委員
会
高知市中心市街地再開発研究委員
会

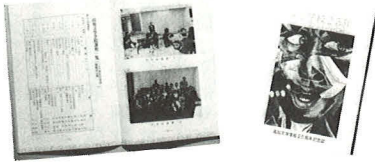
高知文学学校

西村 時衛

高知文学学校は昭和三十三年十一月一日、「高知に文学の土壌を培おう」という合言葉の下に発足しました。教室は丸の内旧中央公民館本館の二階でした。第一期生は受付第二日目に定員をオーバーする盛況で、それこそうれしい悲鳴でした。それから二十八年、ことし七月末、第三十一期生を送り出しました。さらいねんは開校三十周年を迎えます。

高知文学学校は自由な学校です、全講座の半分は聴講してください、というほかに校則はありません。ただ、文学を学ぶということは文学を通じて「人間存在の真実」を探求するということですか

ら、人間の現状にあきたらず、社会の現状にあきたらず、政治の現状にあきたらない人々が文学学校に集まって、内外の作家・作品という他者との対話を通じて、個我を確立しよう、主体的な自我を形成しよう、ということ、いわば文学による人間開眼なのです。それが目的ですからここは作家養成の学校ではありません。が、高知に埋もれている文学の新しい才能が発見されれば、それはそれで喜ばしい限りです。



高響事情

野瀬 泰彦

昭和六年、日響をやめて帰高した浜田善三郎。水田八重次、橋本浩太郎、森田繁、岡寛の諸氏が古城九州男博士のところへ出かけオーケストラを作る中心となってほしいと頼み、遂には氏の承諾を得て高知フィルハーモニックオーケストラが誕生した。同年十一月二十二日の事で、古城氏が初代会長に就任した。

最初の公演は、昭和七年に旧城東中学講堂で、昼夜二回、入場料三十銭で行われた。十五年戦争の戦火拡大で出征者も増え、昭和十九年頃には公演活動は中止状態となった。

戦後の第一回の演奏会は、昭和二十三年に追手前高校講堂で行われ、名称も高知交響楽団と改めた。通算十一回目の定演であった。その後も着実に回を重ね、昭和六十年の第九十五回定演では、地元のコーラス、百五十名の協力により、遂にベートーベンの第九交響曲を取り上げる事ができた。『手作り』の第九は高知でオーケストラとコーラスによる、より高度な音楽を演奏する途を切り拓いたものといえよう。

高響のアマチュア・オーケストラとしての歴史の古さは諏訪交響楽団に次いで全国第二位である。その活



草の葉

関 みな子

何とまあ、女といふものは息の長い生物だろう、とつくづく思う。三十年前、文学好きの婦人たちが八人で始めたのが、一回の休刊もせず四半世紀以上の年月を生きた。ちょうど創刊の年が米国の詩人ホイットマン生誕百年であったので、それにちなんで「草の葉」という名にしたのかとよく聞かれるが、そういうことではなく、雑草のようにしっかりと生きましよう、という意味であった。ほんとにその名のように長く生きてきたと思う。

創刊の時は同人の子どもたちは十歳前後、会が終わると皆そそくさと帰宅したものであったが、いまその子たちも一人前の親になった。同人数は今まで最高の二十名、若い人たちが殖えたのはうれしい。

女性の書く作品は何といつても男性方の社会的視野の広さには叶わないところがあるようで、男性方との共同誌を、と考えることもあるけれども、私がそう言うと言わずに少し考えて、

「やっぱり女だけでしましょ」ということになってしまふ。私とて別に男ざらいというわけではないけれど、女同志というものは何と



ライブ・ライブ

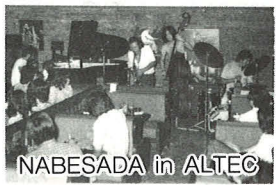
アルテック

高校時代からのジャズ好きが高じて、昭和四十八年七月に北本町四丁目のヤングプラザ2Fに喫茶アルテックを開店しました。開店当初はジャズをレコードで聞いていたといきました。

ところが翌年六月、「渡辺貞夫4」を高新ホールで開催したところ、コンサート終了後に渡辺貞夫一行が来店し、アフター・アワーズの大ジャム・セッションを繰り広げることがありました。

以来、十二年間に約九十回のコンサートを開催しました。アート・ベッパ、ビル・エヴァンスなど、世界的に有名なジャズメンたちも呼びました。ある時は、私が録音した演奏が、「菅野邦彦3ライブ・ライブ」としてトリオ・レコードから発売されるラッキーなこともありました。

当初、店のレコードも、約百枚しかなかったものが、現在では六千枚を超えるコレクションとなりました。



高知文学学校に学ばれた方は十歳代から七十歳代までほぼ二千五百名です。西は宿毛・土佐清水、東は佐喜浜、北は本川・吾北といった遠いところの方もいました。また、今までに何々文学賞という名の賞を受けた方は少なくないし、自著を出版した方も四十人近くいます。その多くは本科終了後研究科に学んでいる方々です。昭和五十五年には高知市長表彰を受けました。今後とも声援ください。

(高知文学学校運営委員長)

連絡先 高知市立中央公民館
電話 246100

動歴ゆえに、昨年の八月三十日にはNHK「音楽の好きな街」に出演し全国で紹介されたのである。

オーケストラはその県の音楽文化の象徴である。奏者も楽器も少ない南の国では、心をよせあい、人を大切にして楽団をつくり上げていくしかない。昭和四十三年から二代目会長を勤めた井沢正三氏が勇退され、本年八月から私が三代目の会長に就任した。「高響は公共に」を合言葉に、県民に「おらんくのオケ」として愛される道筋をみつめていきたい。

(高知交響楽団会長)

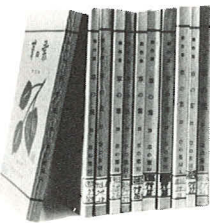
連絡先 電話 25588

なく清らかでもよるいな。

もつとも毎月第一日曜の例会には、女につきものの衣装に化粧、人のうわさは厳禁、もつぱら勉強に終始する。皆さん聡明な方たちはかりなので、前の晩はよく眠ってアタマを明晰にして行くことにしている。

(草の葉同人)

連絡先 電話 39333
関みな子方



ジャズのあらゆるリクエストに応えられると自負していますので、是非とも皆さんに聞いていただきたいと思っております。

また、定休日(第一、第三木曜日)には、店を地元のミュージシャンに、演奏会場として貸しています。PA機材、照明やピアノ(ヤマハCF)も完備していますので、種々のコンサートに活用していただけます。今後とも、国内、海外のジャズメンの招請と高知の音楽活動の隆盛のためにに全力を尽くしていきます。

(青山清水・アルテック店長)

連絡先 電話 4577

異文化への対応

今年一月、カリフォルニア州サンタモニカで起った日本人女性木村文子の母子心中事件(母だけが生残った)の裁判は、米国人がこれをどう裁くか、いはゆる異文化問題にどう対処するかで米国内の話題を呼んだ。この十月十八日に本格的審理無し、つまり陪審裁判に掛けない司法取引きという制度によって、執行猶予付きのほぼ無罪に近い結果で終ることになったと報道された。こうなればもはや裁判とは云えないだろう。江戸の大岡裁きのようなものだ。

個人主義の西洋流考え方でいくと当然これは重い罪を架せられる筈であった。最初の「第一級殺人罪と幼児虐待罪」から「殺意なき殺人罪」に罪状が、格下げされた結果である。

風伯

検事は「日本の異文化に理解を示して罪名を変更したわけではない」と云っているが、これはすでに西洋文化の東洋文化による一つの変革であり、二一世紀へ向けての世界像の在り方を示唆する事件の一つであったと云えるかもしれない。米国人が日本人の心情をどこまで理解したかは判らぬが、西欧流ヒューマニティーを超えた問題として、米国人に永く記憶されることであろう。結果的には生と死の考え方の違いである。東洋における男女の心中事件となれば尚更であり、殉死の思想も同じ系列と見てよいが、世界がこうした心の問題を今後どう考えてゆくか興味深いところである。日本人は日本人で、また日常茶飯事のこの問題を西洋流に悩んでみることであり。(由外)

新しい胎動

今年春に開館した伊野町の「紙の博物館」は、出色のものである。他県から来客があったときなど、よくここに案内するが、非常に喜ばれる。文化の時代といわれるこのころは、美術館や博物館をつくるのがどこでも流行に変わったが、その多くが建物は立派でも中身はいまひとつといったありさまになっていくなかで、この博物館は建物、展示ともに洗練されており、訪れるものを十分に満足させるものを持っている。新しい高知の観光資源ともなる。

東では安芸市の「書道美術館」につぐ第二弾の「歴史民俗資料館」がある。隣村の芸西村でも、ひと足先「歴史民俗資料館」ができて、書道美術館はいまさらいうまでもな

く、なかなかユニークなものだが、歴史民俗資料館にも、今迄のものとはちがう鮮度と意欲を感じさせるものがある。

大月町の「国際彫刻シンポジウム」も、今年の県下の文化活動の評価において絶対見落とすことができない。率直に言っても、今迄の常識からすると町村の域を越すスケールの企画で、小さな町でもやればここまで出来るということを示したものと見える。大月町では西土佐村とともに、地域医療の面でもすぐれた取り組みがされているが、それらとともに新しい村おこしに大きなはずみをつけるものなる。

それにしても、県や高知市が、意欲においてこうした市町村の後塵を拝していたのはいかぬと思う。(華)

ビデオ、写真で残す郷土の記録

高知の映像コンテスト

祭り／曜日／まちの景観、美観／河川／生活の中の文化／コミュニティ活動／高知の見どころ、旧跡など

豊かな表現と斬新な視点で高知を写真してください。

作品受付 昭和61年1月6日
～1月20日

入選発表 2月上旬

詳しい資料の請求、問い合わせは財団まで
電話 73-4365

個性と風格のある街づくり

高知市都市美デザイン賞

デザイン的に優れ、やすらぎを感じさせ、周辺の景観づくりに好ましい影響を与え、都市美の向上に寄与する建造物、建造物で昭和60年に市内でつくられたもの

推薦受付 昭和61年1月6日
～1月20日

入選発表 2月下旬

歌うほど気分が良くなる、踊るほど爽快になる。、突き抜けるような高知の青空のもと「龍馬サンバ」は、今年の夏から秋にかけて大きな広がりを見せています。

健康市民祭、鏡川祭り、土曜夜市、よさこい祭り、龍馬まつり、市民のつどい、やまびこカーニバル、大阪（阪）、南丘小（豊中市）など秋の運動会のなかで……
その他、各種研修の場や行事に取り入れられ、これらの模様はマスコミやミニコミ紙で紹介されています。
この曲がスガさんの振り付けとともに登場した頃は、「新しいものが好きだった龍馬にふさわしい」とい

▼文推協龍馬生誕150年記念合同公演
(撮影 武市祐雄)



◀潮江小夏まつり

「龍馬サンバ」の波紋

町青年祭など、各種イベントのなかで……
潮江小夏まつり、前里ふるさとまつり、長浜小子どもまつり、一宮小夏まつりなど、夏まつりのなかで……
高須小、みませ小、江の口東小、高知芸術学園、春野東小、幡陽小（大

う声の反面、「龍馬のイメージに合わない」という意見も聞かれましたが、龍馬の生誕日が近くなった現在では、多くの人々に親しまれ、異なった振り付けも現れて、「龍馬サンバ」は、ひとり歩きを始めたようです。
龍馬生誕百五十年を記念して公募した、「龍馬のうた」のグランプリに輝くこの曲がきっかけとなって、さらにより歌やリズムが生み出され、育っていくことを期待します。



鏡川まつりの水上ステージ
7月27日

「龍馬音楽祭」

龍馬のうた大賞受賞曲

龍馬サンバ

作詞・作曲・歌 島村一夫

編曲・演奏 ぐう ぴい ばあ

*「龍馬サンバ」のレコードは市

内レコード店で好評発売中！

楽譜・振付つき 頒価 八〇〇円

刊行まぢか！

高知県方言辞典

定価 6,000円



高知市文化振興事業団
発足記念出版

特徴

古語から現代語にいたるまでの土佐方言約14,000語を網羅。県下全域にわたって現地協力者を得て、あらゆる日常方言を蒐集。見出し語にアクセント記号を付し、例文を示し、注釈を加えた。方言学者土居重俊、浜田数義両氏の半生にわたる調査研究の集大成。画期的業績。

造本・体裁 A5版・上製・貼函入・約750頁

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目一番三十号
TEL (〇八八八) ⑦四三六五
郵便振替 徳島 8 1 4 8 6 9